

八尾の観光振興 日本遺産と高安千塚古墳群
—河内王朝 雄略天皇 物部氏と百濟王朝 渡来人とともに—

中 良紀

Yao's Tourism Promotion Japan Heritage and
Takayasu Senzuka Tumulus Group
-With Kawachi Dynasty, Emperor Yuuryaku, Mononobe Clan
and Kudara Dynasty, People come and settled from Korea-

Yoshinori NAKA

目 次

要旨

はじめに

第一章 観光産業

1. ブランド力
2. 八尾のブランド力の形成

第二章 河内王朝

第一節 河内王朝と百舌鳥・古市古墳群

1. 世界文化遺産登録申請中の百舌鳥・古市古墳群の概略
「記事紹介」 河内王朝に関する講演会

第二節 河内王朝の歴史的価値

1. 河内王朝はいつからいつまでの時代か
2. 河内王朝の大きな業績 特徴 価値
 - (1) 日本最初の技術変革と成長発展
「記事紹介」八尾の古墳時代—倭の五王時代の中河内—
 - (2) 日本最初の海外進出と交渉
 - (3) 全国統治
 - (4) 河内王朝後期

第三章 八尾の観光振興 日本遺産と高安千塚古墳群

第一節 日本遺産とは

第二節 八尾のブランド形成 高安千塚古墳を日本遺産へ

1. 八尾の観光資源
2. 高安千塚古墳群を日本遺産へ

第三節 高安千塚古墳群

1. 高安千塚古墳群の説明
「記事紹介」 高安千塚古墳群 国の史跡に指定
2. 国史跡 高安千塚古墳群の価値とその未来

第四節 日本遺産登録に必要なストーリー性

1. 雄略天皇の八尾でのストーリー性
2. 物部氏の八尾でのストーリー性
3. 河内王朝と百済王朝の交流のストーリー性
「記事紹介」 河内王朝と百済王朝の交流

第四章 八尾の観光振興策

1. 八尾市観光協会設立とその活用
2. 高安千塚古墳群を日本遺産に登録
3. 世界文化遺産との関連性の強化
「記事紹介」 河内王朝時代 反正天皇の宮跡 柴籬神社と御陵を巡る
4. 八尾のほかの観光資源との一体性の強化
5. 観光拠点となる観光施設の建設
6. 八尾空港と土産物のブランド化
7. イベントの強化

謝辞

参考文献

キーワード 八尾の観光振興、日本遺産、高安千塚古墳群、河内王朝、百舌鳥・古市古墳群
雄略天皇、物部氏、渡来人、百済王朝、昆支王

要旨

1. 本論文を通して八尾の観光振興についてブランドが何より大事なこと、八尾のブランド形成には高安千塚古墳群を日本遺産に登録申請すべきであり、登録されるに十分値することを明らかにした。
2. (第二章) 現在世界文化遺産に登録申請中の百舌鳥古市古墳群はブランドである。その百舌鳥古市古墳群を造営したのは河内王朝であり、高安千塚古墳群も河内王朝のもとで造営された。両古墳群は同じ価値を有している。その古墳群を造営した河内王朝の大きな業績、特

徴、価値を分析した。

- (1) 河内王朝の価値は（1-1）応神・仁徳天皇期以降日本最初の技術変革と成長を遂げたこと（1-2）これには海外進出と海外よりの技術導入の成功があったこと（1-3）この技術変革と成長により全国統治を成しえたことである。雄略天皇期には朝鮮進出の強化と中国との外交交渉の強化、大規模な渡来人と渡来技術の受け入れ、大連大伴氏と物部氏の積極的な活用、八尾は物部氏活用による鉄鍛冶、治水灌漑、馬飼いや馬具を活用した技術変革の中心地として発展させた。河内王朝の中でも、大きな業績特徴がある。
 - (2) 河内王朝の期間は、応神天皇・仁徳天皇の時代を河内王朝前期、雄略天皇を軸とする倭の五王時代までを中期、倭の五王のあと天皇を助け大きな影響力を持った河内の大伴氏・物部氏が活躍し政治を支えた時代までを河内王朝後期としてとらえ、前期中期後期各100年合計300年を河内王朝と分析した。
- 3.（第三章）八尾の観光資源を分析し、世界文化遺産につぐブランドである日本遺産を取得すべきとし、百舌鳥古市古墳群と同じ価値を有する高安千塚古墳群の日本遺産登録申請を提案した。高安千塚古墳群は、八尾で河内王朝が技術変革と成長を遂げたこと、古墳造営には渡来技術が活用されたこと、雄略天皇、物部氏、渡来人が融和協力の上に成し遂げられたことなどが特徴で、百舌鳥古市古墳群と同じ価値をもっている。詳細説明のため（1）日本遺産とは何か（2）高安千塚古墳群の詳細（3）日本遺産登録に必要な高安千塚古墳群のストーリー性について明らかにした。
- 4.（第四章）最後に高安千塚古墳群の日本遺産登録を軸にした八尾の観光振興の具体策について明らかにした。

本論文は単なる古墳群の説明だけでなく、古墳群を造営した河内王朝の歴史的論理的価値を明らかにし、観光政策としてその価値を有する高安千塚古墳群を観光のブランドとして活用していくことを提案したものである。

はじめに

八尾の地域振興、特に古代史を活用した観光振興について、講演会、イベント、古事記をはじめ古代歴史著書、神社関係の研究の洞窟環境NET学会論集等で取材調査研究してきた。その古代史を活用した八尾の観光振興について百舌鳥古市古墳群、河内王朝、百済王朝との関係、八尾の古墳からの出土品、高安千塚古墳群を中心に、平成24年10月以来河内新聞および洞窟環境NET学会紀要や講演会で発表してきた。今回新たに河内王朝の歴史的論理的価値及び日本遺産についての研究を加味し、古代史を活用した八尾の観光振興について論じた。観光産業振興は雇用増進 税収増を実現する重要な産業である。高安千塚古墳群が日本遺産登録を果たしブランド化され、八尾の観光振興、地域振興につながればと思う。

第一章 観光産業

1. ブランド力

観光産業は地域振興にとって非常に重要である。観光産業の裾野は、観光地の景観場所 神社 仏閣 レジャー施設 温泉施設 宿泊施設 スポーツ施設 グルメ 土産物を含めた物産とその施設 観光案内施設と諸サービス、運輸 建設 広告 情報発信制作 情報通信 データベースとIoT産業、金融等と裾野は非常に広く、これらに関わる人は多く地域の雇用に大きく影響する。今や観光産業はその地域の経済や景気を大きく左右する重要産業である。

特に重要なことは、観光というのは 見て光を感じる、光が見えることであり、ここでいう光は観光客にとって価値があることであり ブランド力があることである。ブランド力がなく、大して有名でなく、大して価値がなければ、多くの観光客は来ない。観光資源はどこにでもあるが、それにブランドや価値がなければ本当の観光資源ではなく、観光客は行きたいとは思わないからである。

ではブランド力のある観光資源が無ければどうするか。

2. 八尾のブランド力の形成

ブランド力ある観光資源としては世界文化遺産はいうまでもないが、その次のブランドとして日本遺産、国史跡がある。八尾としてはせめて日本遺産が必要である。その日本遺産に国史跡の高安千塚古墳群を申請することを提案したい。またその日本遺産が複数の世界文化遺産と関連性があり、しかも地域が隣接しておればその日本遺産は世界遺産と一体となり日本遺産のブランド力は輝いたものになる。

八尾高安千塚古墳群は、世界文化遺産登録申請中の百舌鳥・古市古墳群および世界文化遺産の法隆寺とは、河内王朝の歴史やストーリーで密接に関連しており、またこれら世界文化遺産とは隣接している。高安千塚古墳群のブランド力は高く、八尾のブランド力形成に重要である。ぜひ高安千塚古墳群を日本遺産登録に推し進めたい。

第二章 河内王朝

まず高安千塚古墳群の基本となる百舌鳥・古市古墳群と河内王朝の特徴や価値について明らかにしたい。

第一節 河内王朝と百舌鳥・古市古墳群

1. 世界文化遺産登録申請中の百舌鳥・古市古墳群の概略

百舌鳥古墳群は堺市の標高15～20mの台地上に4キロ四方に広がる。全長486mの仁徳天皇

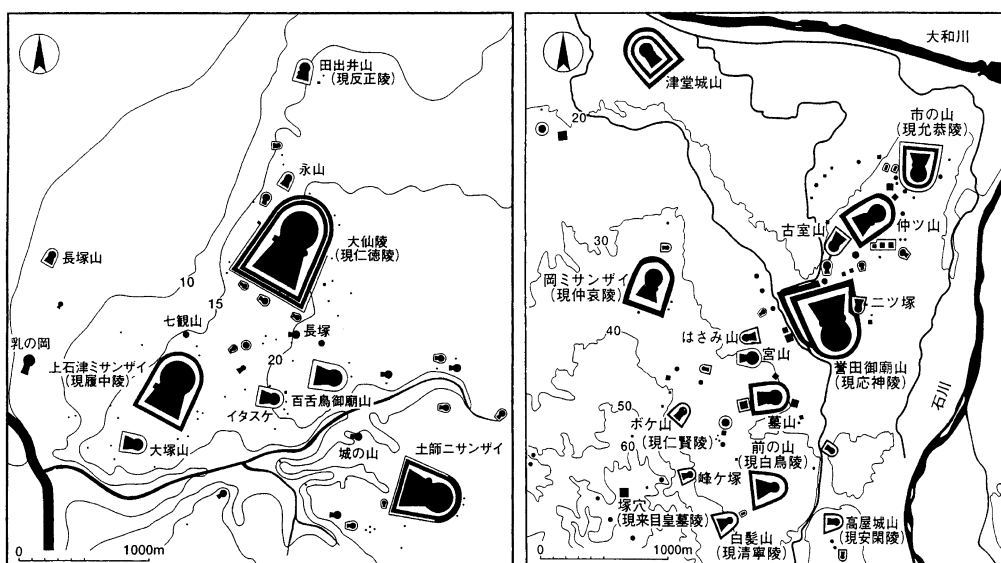
陵古墳、全長365mの履中天皇陵古墳、全長290mのニサンザイ古墳など、44基がある。世界文化遺産申請はこの内23基が対象になる。

古市古墳群は藤井寺市から羽曳野市にかけて国府台地羽曳野丘陵にあり、全長425mの応神天皇陵古墳、全長290mの中津姫陵古墳など45基が存在する。世界文化遺産にはこの内26基が対象となる。

百舌鳥・古市古墳群で合計89基あり、世界文化遺産対象は49基である。

仁徳天皇陵古墳は全長486m、敷地面積463,153平方メートル（甲子園球場の35倍）で日本一大きい古墳である。応神天皇陵古墳は仁徳天皇陵古墳に次ぐ大きさだが、墳丘の盛り土の量は1,434,000立方メートル弱と仁徳天皇陵古墳を上回る。

百舌鳥・古市古墳群には全長200m以上の古墳が11基あり日本一の規模を誇る古墳群である。



百舌鳥古墳群 (堺市)

古市古墳群 (羽曳野・藤井寺市)

百舌鳥・古市古墳群と河内王朝に関する講演会要旨を河内新聞に掲載したので、参考に紹介したい。

「記事紹介」(河内新聞 平成24年10月5日付け)

「河内王朝に関する講演会」

平成24年9月9日 大阪府立近つ博物館主催で「河内王朝論をめぐって」と題する講演会が開催された。講師は京都大学名誉教授上田正昭氏と近つ飛鳥博物館館長白石太一郎氏で、講演題目は上田氏が「河内王朝論を考える」、白石氏が「考古学からみた河内王朝論」であった。

現在大阪府では百舌鳥古墳群と古市古墳群を世界文化遺産に登録してもらうべく申請中である。これら古墳群は世界最大の前方後円墳である仁徳天皇陵古墳はじめ応神天皇陵古墳などの大型古墳を中心に多数の天皇陵古墳を含み、河内王朝時代に築造された我が国を代表する古墳群である。

以下両先生の講演内容の要約である。

大阪府立近つ飛鳥博物館館長 白石 太一郎氏 「考古学からみた河内王朝論」

1. はじめに百舌鳥古墳群と古市古墳群の説明があった。大和古王朝時代には大和三輪山の箸墓古墳等の大和・柳本古墳群や奈良北部の佐紀古墳群ができ、その後河内に大きな古墳群が次々と築造された。
2. 大和古王朝では古墳祭祀を重点としたが、河内王朝では河内の開発で豊かになり、大王の権力が大きくなったことを現すモニュメント的な意味合いが増し古墳は巨大化していった。墳墓全長350mをこす大型の応神天皇陵や履中天皇陵が造営されたが、仁徳天皇陵は墳墓全長486mの世界最大の前方後円墳で秦の始皇帝の古墳より大きい。大林組の試算では延べ680万人15年の歳月を要したとある。
3. なおこの時代の河内は大阪平野に大きな河内湖があり淀川以南の上町台地や河内湖から和泉地方までの大きな地域をさす。モニュメントとしての必要性は九州、吉備地方等国内へのアピールだけでなく、中国、朝鮮半島の外国に威信を示すためでもあった。応神天皇の時代以降河内王朝時代には九州、吉備地方、中国、朝鮮半島との関わりが多く、河内は政治交易の中心地になっていった時代である。そして百済より七支刀を贈られてきた頃より、多くの渡来人がやってきた時代であった。

京都大学名誉教授 上田 正昭氏 「河内王朝論を考える」

1. 大和三輪山の王権の天皇の和風名は、「いり 入り」という文字がはいる名前がつけられた。一方河内王朝の天皇の和風名は「わけ 別」という文字がつけられた。顕著な違いがある。
2. 河内の天皇陵古墳の大きさは、大和三輪山王権時代より大きく巨大化され王朝が河内に移ったことを現す。
3. 天皇の宮の伝承も応神天皇の大隅の宮、仁徳天皇の高津の宮、反正天皇の柴籬の宮、雄略天皇の志幾の宮、顕宗天皇の近つ飛鳥の宮など難波から河内にかけてである。
また大伴氏、物部氏の有力氏族のこの時代の本拠は河内である。(なお難波の宮で5世紀の大きな倉庫群の建物跡が発見されており、上町台地に王宮があり政務をここで執り行われていたことは明らかである。)
4. 5世紀初めの高句麗好太王の碑文の中に倭の大王と治天下という文字、5世紀半ば過ぎの

雄略天皇時代の稲荷山古墳（埼玉県）の鉄剣の銘文の中、江田山古墳（熊本県）の太刀の銘文の中に雄略天皇の名前と大王と治天下という文字が刻まれており、天皇が天下を治めたことを示している。

5. 5世紀の宋の史書「宋書」に書かれている倭の五王は、河内王朝時代の仁徳天皇の子の履中天皇、反正天皇、允恭天皇、允恭天皇の子安康天皇、雄略天皇に対応するもので、河内王朝は国際的な交渉を行ったことが記されている。

第二節 河内王朝の歴史的価値

1. 河内王朝はいつからいつまでの時代か。

河内王朝の前までは、大和三輪山の麓で大物主神を祭祀としてその祀りを三輪山で行うことにより豪族達を統率した大和王権時代であり、崇神天皇から、代々その地で政務を執った仲哀天皇・神功皇后までである。河内王朝は仲哀天皇・神功皇后の子応神天皇から始まる。応神天皇が伝統的の王宮を大和に置きながら河内の開発に乗り出し河内大隅の宮を河内国西成郡（墨の江住吉方面から上町台地方面）ないし東淀川の大隅地区に置き、大古墳を河内恵我今の古市に造営したことから河内王朝は応神天皇に始まり、河内王朝の最後は河内で大連として歴代天皇に仕え権力を伸ばした大伴氏・物部氏が、蘇我氏に勢力を奪われた欽明・敏達・用明天皇時代までと言える。

そしてその期間は代表的な業績の特徴から大きく3つに分けることができる。

（前期）応神天皇・仁徳天皇の時代（四世紀代約100年）、

（中期）雄略天皇を最盛期とする履中天皇からの倭の五王時代（五世紀代約100年）、

（後期）大伴氏・物部氏が天皇家を支え全国に勢力を拡大した継体天皇から用明天皇までの時代（六世紀代約100年）である。

この期間の約300年間は河内王朝である。

2. 河内王朝の大きな業績 特徴 価値

（1）日本最初の技術変革と成長発展

河内王朝の前の大和三輪山王権時代は、自然にめぐまれた肥沃な農地が大和にあり、三輪山を祭祀とする大王による祭祀中心の政治であった。

河内王朝になると、日本最初の農業、製造業、文化面で大きな技術開発・技術変革を成し遂げ、今までの木製の農耕具から鉄製の農耕具や灌漑工具の開発、灌漑技術の開発、鉄製の武器の開発、馬の輸入飼育と馬具の開発、熱に強く耐久性のある須恵器の開発、衣料製造の発達等を成し遂げた時代である。これにより治水灌漑が改良され、河内湖や大和川の氾濫で低湿地帯

であった河内方面が良好な農地に改善され、農業生産力が飛躍的に発展した。これを実践した天皇家は大和と河内で大きな財力を形成し、全国に統治を広げることができた時代である。そしてその象徴といえるのが百舌鳥・古市古墳群であった。

即ち大古墳群の造営は日本最初の技術変革と成長の証しであった。

河内王朝各期毎に技術変革と成長の特徴を見てみる。

(河内王朝前期) 応神天皇時代から技術変革は進みだし、仁徳天皇の時代には日本最初の大規模土木事業が次々に行われた。難波の堀江の開削、茨田の堤の築造、感玖大溝の堀削、狭山池の築造、東除川・西除川流域の水田化、河内湖沿岸の干拓など、治水灌漑工事により大きな農地開拓を進め、河内を豊かな農地に開拓した。

(河内王朝中期) 雄略天皇は河内志幾の宮で指揮を執り、技術変革と河内の成長発展をさらに推し進めた。大連となった物部氏は八尾渋川を本拠地として技術変革を継承し、八尾は物作りの本拠地となった。八尾の古墳や遺跡からは、鍬や鋤に取り付けるU字型の鉄製の農耕具、久宝寺北遺跡や亀井遺跡からは、新しい治水灌漑技術で作られた大規模な堰や護岸施設が発見されている。これらの技術により河内の農業生産力は飛躍的に発展した。勿論須恵器も発見されており食事や生活の文化が向上した。また鉄製の武器や馬飼いの技術、馬具、製塩技術も出土している。鉄鍛冶や馬の活用は武力や運送力を強化し、全国統治を推進するに寄与した重要な技術変革であった。

(河内王朝後期) こうした技術が河内では難波の上町台地方面に拡大するとともに、地方の豪族にも継承拡散させていき、この過程で王権による地方の支配が一層進展していった。王権直轄支配の管理のための屯倉もこの時代に非常に多く増設された。

こうした技術変革をおこした工具や製品の出土品についての講演会が八尾で開催されたので記事を河内新聞に掲載した。参考に紹介したい。

「記事紹介」(河内新聞平成28年2月15日付け)

「八尾の古墳時代—倭の五王時代の中河内—」

八尾市埋蔵文化財調査センター主催で、倭の五王時代の八尾の古墳と出土品に関する講演会が、平成28年1月24日幸町の埋蔵文化財調査センターで行われた。

講演会は、日本の大型古墳の変遷、八尾の古墳、八尾の古墳からの出土品の説明がなされた。八尾の古墳時代の農業、工業工事技術力の高さを示すもので非常に貴重な講演会であった。

1. 大型古墳の変遷

日本の古墳時代は3世紀半ばから7世紀までといわれる。大和三輪山を中心に前方後円墳の

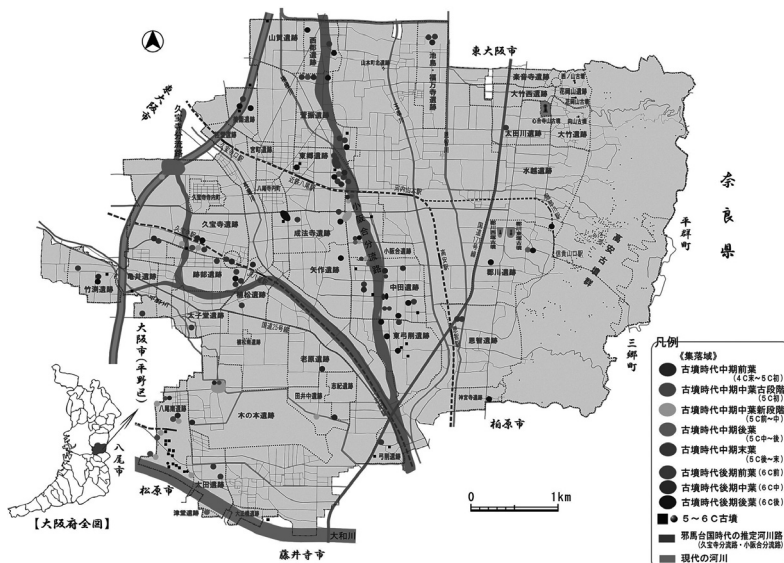
箸墓古墳を最初とする大和柳本古墳群—奈良北部の佐紀古墳群—河内の百舌鳥古墳群、古市古墳群と続く。その中で河内にある応神天皇、仁徳天皇及びそれに続く倭の五王の河内の古墳群が最大の古墳群であり、その時代の国力を示すものである。

2. 八尾の古墳

八尾には大型古墳はないが、貴重な出土品のあった古墳がたくさんある。講演会では、3世紀から4世紀の久宝寺古墳群、近鉄八尾駅及び市域北西部の東郷古墳群、萱振1号墳、美園古墳、高安駅西部の中田古墳、5世紀の大坂経法大西部の心合寺山古墳、国道25号線西端の亀井古墳、地下鉄八尾南駅及び北側の八尾南遺跡の詳細説明があった。

3. 出土品

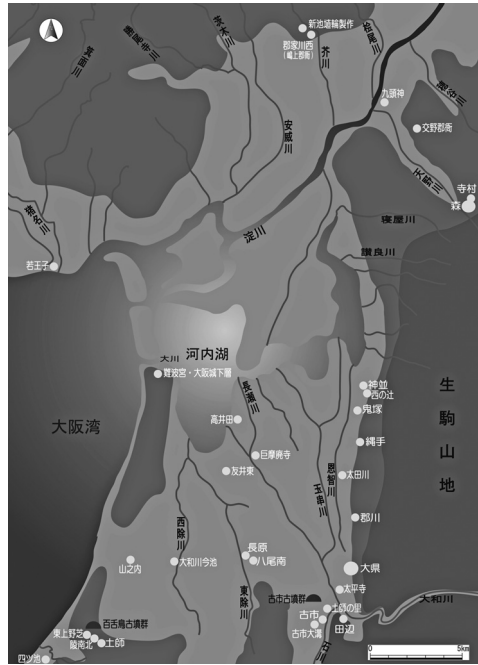
- (1) 4世紀から6世紀の土師器及び須恵器は各古墳から出土
- (2) 韓式系土器：朝鮮半島南部に見られる韓式系土器は5世紀の久宝寺古墳群の久宝寺遺跡、八尾南遺跡、6世紀の高安千塚古墳群から出土
- (3) 鉄鍛冶関連遺物 農業、工業、工事の生産性を飛躍的に高めた4世紀から6世紀の鉄製造鍛冶具：八尾南遺跡、心合寺山古墳そばの太田川遺跡、高安千塚古墳群そばの郡川遺跡から出土
- (4) 治水灌漑工用土木工事技術と農工具：5世紀末から6世紀の洪水から水田を守る堤の造営が亀井遺跡から、堰や護岸施設の工事が久宝寺遺跡から出土、また5世紀の鉄製のU字型刃先の鍬や鋤や曲刃鎌等も出土
- (5) 馬具及び放牧及び馬用の製塩土器：5世紀の木製の鞍、放牧地、馬飼いの建築物遺跡等が八尾南遺跡から出土、製塩用土器は中田遺跡から出土
- (6) 埴輪：各古墳から出土したいろいろな埴輪の説明があった。



八尾の古墳と遺跡



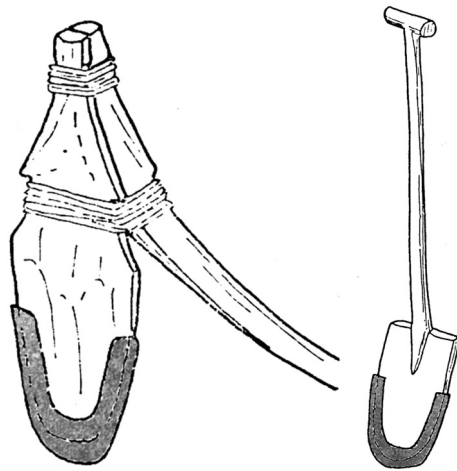
須恵器出土遺跡



鉄鍛冶集落遺跡



馬飼遺跡



鉄製U字形刃先を持つ農具の開発

図資料提供 八尾市埋蔵文化財調査センター

(2) 日本最初の海外進出と交渉

次に河内王朝の大きな特徴は、日本最初の海外交流と進出である。前期、中期、後期毎に特徴を見つめる。

(2-1) 河内王朝前期の応神・仁徳天皇の時代：朝鮮では高句麗が中国前燕に342年に敗れ、勢力拡大を朝鮮南部の新羅・百済に向けた。新羅はまだ弱くすぐに高句麗に準じたが百済は力があり高句麗に対抗した。百済の近肖古王は倭に協力を求め、366年絹弓鉄材料を贈るとともに、372年には369年に製作した七支刀を倭の王に贈り関係を強化するとともに、その年高句麗の平壤を攻め高句麗の故国原王を戦死させている。七支刀は天理市石上神宮に現存する。百済と倭の連合軍は度々高句麗に攻め入ったが、高句麗が好太王の時代になると、高句麗の国力は強化され、396年から407年にかけて百済との戦いに勝利し領土を広げ、倭を伽耶地域に追いやった。このあたりの歴史は、好太王が亡くなった412年から2年後414年に高句麗の北方にある都、集安に建てられた広開土王碑の石碑に彫られている。

こうした歴史的背景のもと応神期に百済伽耶地域より、王仁、秦氏の祖、東漢人の祖、阿知使主等最初の多くの渡来人の来朝があり、鉄製造技術、文字などが伝わった。河内王朝は百済と伽耶との交流を深め支援しつつ、伽耶地区の鉄材料を入手しつつ渡来人と渡来技術を受け入れていった。

(2-2) 河内王朝中期の倭の五王の時代：

(2-2-1) 河内地方の開拓が進み農業生産力が、また衣食住の製造技術が強化され、国は豊かになり大王による国の統治も全国に拡大し、大古墳を造営する力をつけた。そしてその豊かな財力を基に海外交流や海外進出は進展させた。河内王朝は中国南朝の宋に朝鮮での統治を認めてもらうべく朝貢のため遣使し官位の上昇の交渉を重ねた。これは宋王朝の歴史書宋書に記載されている。421年に王讃が遣使を開始、438年 珍、451年 済、462年 興、と次第に官位を徐々に上げていき、478年 武（雄略天皇）の時、安東大將軍倭王の称号をえている。ただし高句麗と同等の官位は得られずまた高句麗に共同して攻め入ることを提案したが受け入れられず、天皇は以降遣使を中止し独自で百済伽耶新羅との交流統治を進めていった。倭の五王は履中天皇、反正天皇、允恭天皇、安康天皇、雄略天皇と考えられている。

(2-2-2) 一方朝鮮では 450年以降高句麗好太王の子長寿王が百済に激しく攻め入り、百済は倭に更なる援助を求め、461年百済蓋鹵王は弟の昆支王と部下を倭に派遣した。朝雄略天皇は百済を支援しつつ、彼等を受け入れ大連大伴氏と物部氏の配下に組み入れ、新

たな伴、部という制度を設け統治した。昆氏王は優秀で部下をよく纏めかつ多くの渡来技術を河内王朝に伝えながら15年間以上河内に滞在し、主に河内安宿に居住し後に飛鳥戸神社の祭神として祭られている。高句麗は475年百濟首都漢城を攻め落とし蓋鹵王を殺害した。このため多くの人が倭に渡ってきた。昆支王は475年国に戻り477年亡くなっている。百濟はこの後昆支王の子供とその子孫が王を継いで力を復活させている。

(2-2-3) なお昆支王と共にまたその後に来朝した人は応神期に来朝した人に対し今来漢人、百濟才伎と呼ばれ 多くの鉄器、織物、須恵器、馬の飼育、馬具の製造等の手工業者の集団であり、王 仁氏系の西 文(後の西 漢氏)もこの期に来朝し河内に居住し文字および事務に通じ力を伸ばしている。

(2-2-4) 大伴氏・物部氏が天皇を助け政治に介入した河内王朝後期については後述する。

(3) 全国統治

河内王朝の次の大きな特徴は、海外技術の導入、技術革新を基に成長発展し全国に統治が進展したことである。

雄略天皇は軍事経済の色彩が濃い大連の大伴氏物部氏の活用、伴 部 民の統治制度の活用、近衛兵的舎人の制度の活用、天皇直轄地であり軍事拠点でありその地域の管理拠点である屯倉を増やし全国展開を広げた。その証として、埼玉県行田市の稲荷山古墳から出土した鉄剣の銘文、熊本県玉名郡の江田船山古墳から出土した鉄製太刀の銘文いずれにも ワカタケル大王(雄略天皇)の名前や、治天下大王という文字が彫られている。また千葉県市原市の稲荷台古墳からは王賜の文字いりの鉄剣が出土している。これらの鉄剣は大王がその地域の支配を認める宝器として地方の豪族に授けたものとされている。

(4) 河内王朝後期

河内王朝後期は雄略天皇の5代あとの26代継体天皇から30代敏達天皇31代用明天皇までの時代で、大伴氏と物部氏が重要な役割を果たす時代である。

5代武烈天皇の時代に大きく貢献した大伴氏が、武烈天皇に子供がなかったため越前の豪族おおどのみこ男大迹王(継体天皇)を王位につけた(507年)。ただ天皇家との血縁関係は薄く他の豪族の反対もあり大和の伝統的な王宮に入るのに20年を要した。この間大伴氏物部氏の力添えが特に必要であった。さらに大伴氏、物部氏は継体天皇の時代に九州磐井の乱(527年)を武力平定して力をつけ、以降27代安閑天皇28代宣化天皇の時代まで羽曳野・泉州の大伴氏、八尾・難波の物部氏が海外及び国内で大きく勢力を伸ばした。しかし29代欽明天皇の時代(539~572年)になると後継者問題と過去の任那4県の割譲問題(512年)で大伴氏が失脚し(540年)蘇我氏に取って代わられ、また物部氏も後継者問題と仏教問題で蘇我氏に敗れ(587年)、河内で天皇家に大きな力を持った大伴氏と物部氏の本家筋が衰退して河内王朝はここに終焉する。

河内王朝後期の特徴

- (4-1) 技術革新：成長路線にのり製造規模の拡大が進み豊かさは増す。
- (4-2) 海外外交問題：朝鮮では百済の昆支王の次男武寧王（501～523年）が512年任那4県の割譲を倭に願い実行を受けるなどの改革を行い国力を回復させた。一方新羅は法興王（514～540年）が力をつけ、百済の武寧王の子聖明王の時代532年任那（伽耶）に進出、攻め領地を広げた。河内王朝欽明王は任那日本府の吉備臣を百済に派遣し541年任那（伽耶）諸国の王と百済聖明王と百済復興会議を開く。しかし新羅が勢力を一層増してきたため聖明王は日本に仏教の經典および仏像を献上し一層の応援協力を求めた。しかし562年任那は新羅真興王（540～576年）に攻め落とされ滅亡し海外拠点を喪失した。この任那問題を背景に540年大伴氏が失脚し、また物部氏は仏教を受け入れ敏達天皇（572～585年）の命により百済日羅上人を河内洪川阿斗（八尾市）に住ませ（583年）、日羅寺をそこに建設したにも拘らず、仏教の受け入れ意見の相違や後継者争いも絡んで蘇我氏に滅ぼされている（587年）。
- (4-3) 統治制度：磐井の乱で吸収を平定後、地方の管理拠点の国造を全国に展開を広げ、また屯倉も特に安閑天皇の時代（531～536年）には東は上野西は肥後まで全国に26ヵ所も増設され、全国支配が一層強化された。

第三章 八尾の観光振興 日本遺産と高安千塚古墳群

第一節 日本遺産とは

日本遺産は我が国の文化・伝統を語るストーリーを認定する文化庁主催の日本遺産認定事業で2年前に創設された。これはストーリーを語る上で欠かせない魅力あふれる有形、無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備活用し、国内だけでなく海外にも戦略的に情報発信し、地域の活性化を図るものである。また保全のための新たな規制を図ることを目的とせず、地域に点在する遺産を面として活用し地域の活性化を図るもので、世界文化遺産が価値づけを行い保護を担保することを目的とするものとは違いがある。

日本遺産認定による効果は、様々な取り組みを通じ地域住民のアイデンティティの再認識や地域のブランド化を達成し、情報発信により認知度が高まり、地域創生に役立つものである。

ただし名勝地、遺跡、建造物、祭りなど継承されている文化財や歴史を単に解説するだけではだめで、（1）地域でストーリーを完結するか、複数の市町村にまたがってストーリーを展開する（2）国指定ないし選定文化財を必ず一つを含めることを要求されている。

申請は都道府県の教育委員会を通して文化庁に申請する。この2年間で54件が認定され、地方に観光客を呼び込み、地方観光に活気をもたらしている。政府は今後オリンピックまでに100件を認定する予定で、ぜひ八尾市も早く申請すべきと考える。

第二節 八尾のブランド形成 高安千塚古墳群を日本遺産へ

1. 八尾の観光資源

論文の冒頭で述べたように観光振興にはブランドが必要であり、無ければ今ある観光資源のブランド力をUPさせるか、新たに創造するしかない。

八尾の一般的な観光資源としては、(1)心合寺山古墳、高安千塚古墳群、高安山、信貴山 (2)恩智神社、樟本神社、八尾神社、八尾天満宮、穴太神社、許麻神社、由義神社、渋川神社、弓削神社 (3)由義寺跡、久宝寺寺内町、顕聖寺、常光寺、(4)雄略天皇、物部氏、聖徳太子、弓削道鏡、蓮如上人、今東光、(5)河内音頭、(6)八尾若ごぼう、枝豆などの八尾野菜 (7)八尾空港 などがある。

2. 高安千塚古墳群を日本遺産へ

八尾の観光資源を見ると観光資源はあるが肝心のブランド力のあるものはない。従って今ある観光資源に価値をつけてブランドにもっていくか、新たにブランドを創るしかない。が後者は簡単ではなく前者を考えるべきとする。上記の観光資源の中でブランド力がつきそうなものが、国史跡に登録された高安千塚古墳群である。

高安千塚古墳群を日本遺産に登録しぜひ観光のブランド力をつけるべきである。

高安千塚古墳群を推薦する理由

(1)雄略天皇と物部氏に仕えた八尾高安の渡来人が造営した百済伽耶系の精密技術で作られた大きな横穴式石室を持った古墳があり海外交流を現す価値ある古墳群である。(2)河内王朝雄略天皇の伝説が古事記で展開されている場所であり、雄略天皇の河内の王宮志幾の宮があった場所が近い。(3)またモースが調査し海外に発表している価値ある古墳群である。(4)さらに百舌鳥古市古墳群とは違い古墳の中に入ってみることができる。(5)自然に恵まれ景観のよい高安山の麓にあり、信貴山にも連なりウォーキングやハイキングにも適している。(6)心合寺山古墳、恩智神社にも近い。(7)農家や造園業者との提携も可能である。(7)交通の便もよい。など多くの価値を含んだ観光資源である。ぜひ日本遺産に登録申請すべきであると言える。

八尾としては、国史跡である高安千塚古墳群申請に、雄略天皇・物部氏・日羅上人(八尾で聖徳太子に仏教を教える)・聖徳太子・渡来人のストーリーを織り込み、八尾単独ないし東大阪・柏原・羽曳野との提携で申請するのが良いと考える。

第三節 高安千塚古墳群

1. 高安千塚古墳群の説明

国史跡に認定された時の講演会の記事を河内新聞に掲載したので紹介する。

「記事紹介」(河内新聞平成27年10月25日付け)

記念シンポジウム開催 (平成27年10月3日)

「八尾の歴史遺産 高安千塚古墳群 国史跡に指定」

～国史跡へのあゆみ、そして未来へ～

高安千塚古墳群は、高安山麓に在り6世紀に造営された横穴式石室を主体とする大型群集墳である。

山麓には300基を超える古墳があるが現在224基が確認され、この内105基が今回国の史跡に指定された。畿内でも有数の大型群集墳である。広範囲に数多くの小古墳が群集する古墳群を国史跡に指定してもらうことは容易ではなかったが、八尾市をはじめ関係者の努力で平成27年3月10日国の史跡に指定された。

1. 概要報告

八尾市教育委員会 吉田 野乃氏

(1) 国史跡へのあゆみ

昭和35年(1960年)白石太一郎氏が調査測量研究され147基の古墳を確認され論文発表。

平成17年(2005年)八尾市教育委員会調査保存事業を開始。保存調査検討会議設置(白石太一郎氏を座長に学術研究者、府下教育委員会関係者をメンバーとする)。

平成23年(2011年)基礎調査完了、総括報告書刊行。

平成25年(2013年)保存活用事業基本構想を作成、国史跡指定申請作業にはいる。

平成27年(2015年)3月10日 国史跡に指定される。

(2) 概要と重要性

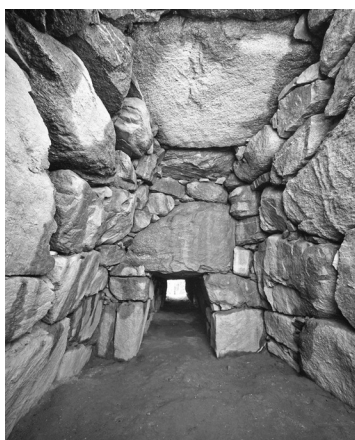
(2-1) 近鉄服部川駅から信貴山口駅の東側の高安山麓の傾斜が穏やかな尾根上に分布している。確認済みの古墳群は北から谷筋によって、大窪 山畑支群(50基)、服部川支群(131基)、郡川北支群(6基)、郡川南支群(37基)の4つの支群からなる。古代から集落が営まれた肥沃な中河内平野の東に位置し、6世紀前半から造営され始め6世紀後半には最盛期を迎え7世紀になると終息した。

(2-2) 200基以上の古墳が良好に残る畿内有数の大型群集墳で、墳丘は円墳、埋葬施設は横穴式石室である。石室は大きな石も使用され規模も大きく構造は精緻な造りである。特に玄室が2室ある構造の二室塚古墳は全国でも例がなく高度な技術が駆使されている。

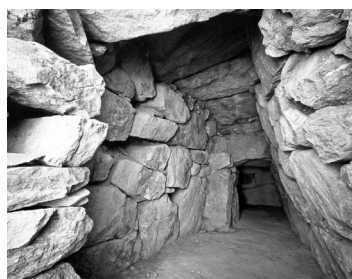
(2-3) 6世紀前半の造営開始時代の古墳(郡川16号墳)では、朝鮮半島のドーム状天井の石室や韓式系土器また渡来系の人々の埋葬習慣であるミニチュアの炊飯具の出土などが発見されている。6世紀後半の最盛期の古墳は大和式の平天井の大型の横穴式石室となる。

7世紀になると造営はなくなる。

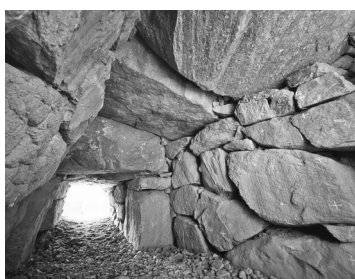
- (2-4) このことから、5世紀朝鮮から多くの渡来人が来日し倭の政権に受け入れられ、鉄製造、治水灌漑、建築、機織、土器、文字などいろんな技術を伝播し経済力財力を蓄積し6世紀には古墳を造営することができた。そして倭の国の統治制度の中で地域の豪族の支配化にはいりそこで融合し発展し、最終的にはその豪族の影響を受けたことがわかる。高安千塚古墳群は朝鮮半島との交流の歴史及び古代国家形成の過程を明らかにすることができる重要な史跡である。
- (2-5) 明治時代には大森貝塚で有名な米国人モースや英国人ガウランドが調査に訪れ彼らによって海外に紹介された国際的な古墳群である。
- (2-6) 古墳は地域の人々の協力によって良好に保存されており、豊かな自然や花、植木畑と調和し、自然と歴史を楽しむことができる美しい景観をもつ貴重な財産である。



開山塚古墳石室
(高安千塚古墳群の中で最大玄室)



二室塚古墳石室



服部川7号墳石室



高安千塚古墳群分布図

写真提供 八尾市教育委員会

2. 講演

大阪府立近つ飛鳥博物館館長 国立歴史民俗博物館名誉教授 白石 太一郎氏

白石氏は同志社大学大学院時代の昭和35年（1960年）より高安千塚古墳を調査研究され、平成17年（2005年）より八尾市の高安古墳群保存調査検討会議の座長を務めて戴き、国の史跡指定に至るまで八尾市に指導助言を戴いてきた。

「大型群集墳としての高安千塚とその造営者たち」

（1）はじめに

地元の方々は早くから古墳群周辺を植木畑として有効活用し大規模破壊を防ぎ、古墳を大切に守ってこられた。八尾市の国の史跡に指定して保存活用を図りたいという熱い熱意が成就したもので大変意義深い。

（2）1960年代の私見

同志社大学の大学院時代より八尾市高安千塚及び柏原市平尾山千塚古墳群を調査研究してきたが、両古墳群とも横穴式石室の内部に入ることができた。それにより型式編年を手掛かりに古墳群の形成過程を追及することができた。その結果高安千塚では6世紀初めから造営が始まり6世紀後半にピークを迎え6世紀末葉には終息する。一方平尾山千塚では7世紀にはいっても同じ様に造営が続いていることがわかった。そこで高安千塚は物部氏の支配下の集団の共同墓地、平尾山千塚は蘇我氏の集団の墓地ではないかと考えた。

（3）近畿の大型群集墳にみられる二つの類型

その後の研究で近畿の大型群集墳には二つの類型があることがわかった。一つは石光山型で奈良県御所市の石光山古墳群である。小型の前方後円墳を中心にその周りに小円墳の古墳が分布し、等質的な小支群には分けられない。古いものは木棺直葬など竪穴系のものも多く、6世紀後半からは大型の古墳に横穴式の石室が採用されている。一方河南町一須賀古墳群では等質的な家族の古墳が順次造営された数基の小支群で構成された横穴式石室墳である。さらにここでは渡来系集団の古墳に特徴的なミニチュアの炊飯具が数多く出土しており渡来系集団が造営したものであることがわかる。

（4）高安千塚の造営者たち

河内の高安千塚 平尾山千塚 一須賀の三大群集墳はいずれも渡来系集団が造営した古墳群と考えられる。5世紀にはいると多くの渡来人が渡来するが渡来受容の中心が河内であったことは、韓式系土器の出土分布からも疑いがない。また高安千塚の終息が6世期末葉であるのに対し平尾山千塚は7世紀以降も造営が続き1500基にもおよぶ。この終息時期の違いから高安千塚は物部氏の支配下の渡来系集団の古墳で、一方平尾山千塚は蘇我氏と関係をもった渡来系集団の古墳群であったと考えられる。河内の大型群集墳の成立と展開は倭国の歴史において河内の渡来人が果たした役割を物語るものである。

3. 講演

京都橘大学教授 一瀬 和夫氏

一瀬氏は平成17年から高安古墳群保存調査検討会議のメンバーで、近年は大英博物館に所蔵されている日本考古学の父、ウィリアム ガウランドのコレクションを調査研究する「ガウランドプロジェクト」のリーダーを務められている。

高安千塚古墳は国内では江戸時代の河内名所図会でも紹介されたが、明治時代になると外国人による調査が行われ海外にも紹介された。高安千塚古墳は横穴式石室をもち明治時代外国人が調査した学史的に国際的に著名な古墳となった。

「各人の活動紹介」

米国人博物学者 エドワード モース

明治10年代から20年代前半に大森貝塚を発見し発掘調査をしたモースは明治12年高安千塚の開山塚古墳や服部川支群の9基を調査し、日本におけるドルメン（巨石記念物）（1880年）として報告発表している。開山塚古墳では現在の実測図に近い平面図や立体図を作成し、服部川地域の古墳のスケッチも残している。

英国人 アーネスト サトウ

1881年 外国人向けガイドブックで高安千塚古墳を紹介。

英国人冶金学者 ウィリアム ガウランド

明治5年（1872年）大阪造幣局に赴任明治21年（1888年）まで滞在し、高安千塚古墳では服部川12基、山畑13基を調査した。また帰国前2年間では、米国人ロマイン ヒッチコックから写真撮影技術を教わりヒッチコックと共にまた単独でガラス乾板式写真機で撮影した。大英博物館では、これら調査報告書、写真、出土土器等の遺跡物が保管展示されている。

2. 国史跡 高安千塚古墳群の価値とその未来

(1) 高安千塚古墳群が渡来系の人々によって造営が始まった背景には、海外情勢と雄略天皇、物部氏及び渡来人が関わっている。高安千塚古墳群には日本遺産登録に必要なストーリー性に満ちている。特に海外との交流に関するストーリーは重要である。

河内王朝雄略天皇（456～479年）は朝鮮百済王朝、伽耶に対する関係を強化し、中国宋朝に対しては国際的な外交交渉を行った。一方百済は南下してくる高句麗に苦戦を強いられ、倭国に軍事的な救済を求めた。百済王朝は雄略の時代に昆支王を461年から約15年間日本に派遣しそれに伴い多くの渡来人も日本に来た。天皇は彼らを受け入れ河内に住まわせ、いろんな技術を取り入れた。国内においては物部氏と大伴氏を大連に任命し、渡来人

については伴、部、戸の戸籍制度を用い統治し活用を計った。渡来人も技術を伝播することで大事にされその地に融合し、物部氏・大伴氏（のちに蘇我氏）のもとで経済力を蓄えながら繁栄し、6世紀には古墳を造営するまでに至った。雄略天皇は八尾志幾の宮で河内や国内政治そして外交や渡来人の管理を治めたと思われる。八尾にとって非常に関係の深い天皇で大切である。

- (2) 一方八尾洪川を本拠地として勢力を伸ばした物部氏は、宗主物部守屋が王位継承問題や仏教受け入れ問題で蘇我氏と争い、587年蘇我馬子に滅ぼされた。その結果物部氏の支配下の氏族も勢力をなくし、高安千塚古墳群はそれ以降造営されなくなった。高安千塚古墳群は本当に古代の国家の成り立ちを現す大事な歴史遺産である。
- (3) 古墳群は高安山麓の自然や見晴らしのよい景観に恵まれた場所にあり、山歩きやリフレッシュに最適である。有名な古墳が次の通りある。案内資料は八尾駅前八尾市観光協会案内所にあるので、参考にして有名古墳巡りを楽しみたい。

大窪 山畑支郡：来迎寺境内にある抜塚古墳、俊徳丸鏡塚古墳

服部川支郡：ガウランドが調査報告した二室塚古墳、大きい玄室とモースがスケッチした服部川7号墳、玄室が大きい服部川42号墳

郡川北支郡：高安千塚古墳最大の玄室でモースが図面を作成した開山塚古墳

- (4) このように高安千塚古墳群は国内および国際的に重要な歴史的意義を持ち、自然に恵まれ、しかも実際に手に触れることが出来る古墳群で歴史遺産として本当に価値がある。今はインバウンドの時代でもあり、観光振興地域振興の大事な資源である。

第四節 日本遺産登録に必要なストーリー性

高安千塚古墳群が日本遺産に登録されるにはストーリー性が必要である。高安千塚古墳群に関するストーリーとしては、高安千塚古墳群の価値とその未来（2-1）で説明したが、ブランド性の高い雄略天皇と物部氏のストーリー性を掘り下げたい。

1. 雄略天皇の八尾でのストーリー性—志幾の宮はどこか？ 日下の恋は。

- (1) 中国の宋書に書かれている通り、雄略天皇は朝鮮半島における統治を積極的に進め、昆支王はじめ多くの百済人を石川や高安方面の河内に住ませ、彼等を統治しつつ海外情報の入手や諸工業の技術導入を図っていた。そして執務を執った王宮は地理的に遠くて不便な大和の宮でなく、河内の志幾の宮で執り行われたと考える。河内志幾の宮は、昆支王がいた羽曳野安宿部と物部氏がいた八尾洪川の両方を見ることができ、大和との交通の便に良い場所であったはず。高安山の麓で志紀遺跡、志幾の県主の館、恩智神社、由義神社付近であったと思われるが、志幾の宮は、どこにあったのか。そのストーリーは。

- (2) 雄略天皇の皇后は日下の大日下王の妹の若日下部王であり、二人は仁徳天皇と妃の髪長

比売の子供であり大日下王は日下から高安の河内を統治していた。古事記によれば、雄略天皇の兄の安康天皇が若日下部王を雄略天皇の後に迎えたいと立派な贈り物を兄の大日下王に贈った時、安康天皇の使者がそれを自分の物としたうえ其の罪を大日下王に被せた。そのため、大日下王は安康天皇に殺されてしまう。殺された大日下王の子の眉輪王は大きくなった時安康天皇を親の仇と殺害してしまう。これに怒った安康天皇の弟雄略天皇は眉輪王と彼を庇った葛城家宗主の円王を殺害してしまう。

- (3) 一方雄略天皇は后として若日下部王を皇后に迎えるため、大和から山越えて日下に入ってきた時、天皇の宮殿と同じような立派な屋敷で屋根の上に堅魚木をあげた屋敷を見つけ、誰の屋敷かと激怒し焼き払おうとした。屋敷の持ち主は志幾の県主の館で、彼は頭を地につけ謝り、布と鈴をつけた白い狛犬を差し出し許しを請うた。天皇は許しその白い狛犬を日下の若日下部王に求婚の贈り物とした。

このような話が古事記に記されている。

2. 物部氏の八尾でのストーリー性—物づくりの拠点を作ったのは。仏教は。

雄略天皇は物部氏と大伴氏を大連に任命し、物部氏を八尾洪川に大伴氏は羽曳野石川に住ませ統治させた。

- (1) 物部氏は渡来技術と渡来人を活用し技術変革と河内の生産力の発展に寄与し、洪川に大きな館を作りそこを拠点に八尾を物作りの地域として体制を整備し勢力の地盤を固めた。雄略天皇を頼って渡来してきた昆支王をはじめとする百済渡来人は、物部氏の配下に組み入れられ物部氏の技術変革成長に大きく寄与した。物部氏は軍事面、農地開拓、生産技術変革と成長を担っており、鉄器を組み込んだ武器の製造でも力をつけていた。継体天皇の時代には、九州磐井の乱を軍事力で鎮圧し天皇家への発言力も増し勢力を拡大した。また治水灌漑と物作りを八尾で進展させるとともに玉造を拠点に難波上町台地での物作りにも発展させていく。八尾で物づくりの拠点を作った物部氏。以降現代まで続く。
- (2) 渡来人はこの間に物部氏や河内に馴染み、物部氏の力添えもあり財力を築き、高い技術力で造営された大きく精密な朝鮮式の横穴式石室をもった高安千塚古墳群を造営するまでになった。
- (3) 欽明天皇時代には任那が新羅に攻められ任那日本府が陥落し、百済も苦戦を強いられ日本に仏教経典や寺院建築技術を贈り百済への協力加勢を求めた。次の敏達天皇は朝鮮問題を心配し百済にいる倭の日羅將軍を呼び、物部氏の拠点八尾洪川阿斗に住ませ情勢を検討した。日羅將軍は仏教に造詣が深く日羅上人とも呼ばれ、八尾洪川の地に日本最初の仏教寺院日羅寺を建立し仏教を広めた。聖徳太子は少年時代に日羅上人に仏教を教わったが、日羅上人の指導と威光に大変敬服したという。このように物部氏は仏教と馴染みが深かったが、大伴氏の失脚のあとを継いだ蘇我氏が欽明天皇の時代から勢力を伸ばしてくるのを

快よしとせず、天皇后継者問題で対立した仏教の受け入れ拡大問題でも対立し、蘇我氏と一戦を渋川で交えた。しかし物部家宗主、守屋は敗れその地位を蘇我氏に取って代われ、政治の拠点も飛鳥に移り、ついに長く続いた河内王朝はここに終焉した。高安千塚古墳群の造営はこの後なくなった。

3. 河内王朝と百済王朝の交流のストーリー性—技術変革と仏教

百済王朝昆支王と雄略天皇とのストーリーと、八尾が技術変革と仏教伝来の大きな役割を担った記事を河内新聞に掲載しているので参考に紹介する。

「記事紹介」(河内新聞平成26年4月15日付け)

「河内王朝と百済王朝の交流 技術変革と仏教」

1. 羽曳野観光協会後援の古代日韓交流イベント

この3月21日、羽曳野観光協会後援の古代日韓交流イベントが開催された。5世紀に河内王朝と百済との交流に貢献した百済王朝の昆支王(第21代蓋鹵王の弟)を語るイベントで、日韓双方による合唱、大阪国際大学教授笠井敏光氏と作家玉岡かおるさんの歴史トークが行われた。韓国からは、百済最初の都漢城(ソウル)の女性合唱団、第二の都現公州市の大学教授、飛鳥戸神社に昆支王の絵を贈呈された画家や作家が参加。楽しいイベントであった。市民レベルのイベントであっても内容が豊富で観光のファン作りに有効であった。



羽曳野観光協会イベント「昆支王を語る」(河内新聞)

2. 河内王朝と百済王朝の交流 技術変革と仏教

百済王朝との関係は欽明天皇、敏達天皇の時代に新羅の伽耶 百済への侵攻により深刻化した。その中で八尾は仏教伝来と公布と仏教戦争にかかわり、歴史上非常に重要な場所である。

- (1) 雄略天皇時代 (456～479年)：百済は強国高句麗の侵攻に会い苦戦、日本との協力関係の強化を計る。百済第21代蓋鹵王は弟の昆支王を461年日本に派遣し関係を強化した。昆支王は優れた人物で羽曳野飛鳥を拠点に渡来人をまとめつつ日本に15年以上も滞在し日本に鉄・織物・須恵器・馬等多くの技術を広めた。羽曳野の飛鳥戸神社の祭神として今も祀られている。日本も百済を支援したが、強国高句麗は475年百済漢城を陥落させ蓋鹵王は殺害された。昆支王も百済に戻ったが477年に亡くなった。
- (2) 継体天皇時代 (507～530年)：日本生まれの昆支王の子供東城王と武寧王は優秀で百済に戻り第24代25代の百済王になり百済再興を果たし発展させた。以降百済は昆支王の子孫が王朝を継承した。日本は大村氏物部氏が有力な時代で大連大村金村は512年任那4県を百済に割譲した。(後になって大村氏失脚の原因にされる)
- (3) 欽明天皇時代 (539～571年)：この頃になると東の新羅が力を伸ばし、伽耶や百済を攻めてくる。562年任那日本府を滅ぼし百済に迫る。百済第26代聖明王は552年日本に仏像、経典、造仏人等を贈り日本との関係強化を計った。これが日本最初の仏教伝来となる。大伴氏は任那4県の割譲の責を問われ失脚し、物部氏と蘇我氏が2大勢力となる。
- (4) 敏達天皇時代 (572～585年)：天皇は百済情勢を分析のため、百済に派遣していた日羅上人(大伴の部下阿利の子供で百済生まれ)を日本に呼び戻し情勢を聞くため八尾の阿斗の桑市の館に住ませた。日羅上人は百済では将軍でもあり文武に秀でしかも仏教に造詣の深い立派な人物であった。天皇は583年上人のためこの地に日本最古の寺院日羅寺を建立し、現樟本神社内に伝わる。日羅上人開基や関係の寺院は大阪、奈良、兵庫、九州ほか全国に百以上あり、奈良橘寺には木造日羅立像がある。幼少の聖徳太子は日羅上人に大きな感銘を受けられたという。その頃大和河内で勢力を二分していた蘇我氏は仏教を擁護、物部氏は神社崇拜排仏を唱え対立を深め王位継承問題でも対立する。
- (5) 用明天皇 (585～587年) 推古天皇 (593～628年) 時代：聖徳太子の父用明天皇が亡くなるとすぐ蘇我氏聖徳太子連合軍は、八尾渋川阿都の物部氏の館(現渋川神社から跡部神社付近)を攻め最後は阿斗に近い衣摺で滅ぼした。仏教戦争とも呼ばれる。ゆかりの史跡として近くに大聖勝軍寺や物部守屋の墓や樟本神社等がある。

河内王朝は大和王権に百済王朝の技術・文化・宗教を加味し、新たな変革と成長発展をとげ全国統治を遂行した。スケールの大きなストーリーをもつ王朝であった。

第四章 八尾の観光振興策

1. 八尾市観光協会設立とその活用

八尾市観光協会は2013年11月に発足し、翌年4月17日八尾で初めて観光案内所を近鉄八尾駅下にオープンした。八尾は歴史と自然に恵まれた観光資源が豊富である。

高安千塚古墳群、心合寺山古墳、聖徳太子ゆかりの大聖勝軍寺、毘沙門天信貴山、高安山、雄略天皇物部氏ゆかりの恩智神社、物部氏ゆかりの渋川神社、敏達天皇建立の日本で最初の仏教寺院日羅寺・樟本神社、道鏡と孝徳天皇ゆかりの由義寺跡、蓮如上人ゆかりの顕証寺と久宝寺寺内町、今 東光、河内音頭、八尾空港などたくさんある。高安千塚古墳群の日本遺産登録に向けた戦略的な活動と八尾のその他観光資源との一体的な観光振興を八尾市とともに全力で推進されることを期待したい。

2. 高安千塚古墳群を日本遺産に登録

高安千塚古墳群を日本遺産に登録し、観光ブランド力を高める。

これについては論文上記で詳細説明済みでそちらを参照いただきたい。

3. 世界文化遺産との関連性の強化

(1) 高安千塚古墳群と隣接する世界文化遺産との関係性を強化する。

河内王朝は国際交流を生かしながら高度な製造、工事の技術を取り入れ実践し河内平野の大規模な治水灌漑工事や肥沃で広大な農地を開発した。その結果として大規模な歴代の天皇の御陵や古墳群や渡来系を含む群集墳を築いた。さらに仏教布教の礎を作った河内王朝。八尾はこれら歴史の役割を担って発展してきたので、高安千塚古墳群と河内王朝に加えて仏教、聖徳太子、世界文化遺産の法隆寺等との関連性を重視した観光振興も大事である。

聖徳太子関連の観光資源は、日羅上人・日羅寺を祀る樟本神社、聖徳太子が少年時代物部氏と戦う前に勝利を祈って加護された高安山につづく信貴山、物部氏に勝利したことで建立された大聖勝軍寺、平群を通して建つ法隆寺、久宝寺をこえて四天王寺、高安信貴山の南の太子町には太子の御陵と叡福寺がある。八尾はその中心地点であり、太子の全てを案内できる大事な拠点でありブランドである。

高安千塚古墳群が日本遺産に登録なれば、百舌鳥古市古墳群と聖徳太子の世界文化遺産を合わせた一つのブランドとすることができ、しかも高安千塚古墳群は海外との交流の歴史もあり、インバウンドを含めた観光振興および地域振興に貢献できることは明白である。

(2) ほかの有力なブランドとの関連性の強化

百舌鳥古市古墳群の仁徳天皇大仙古墳及び反正天皇陵には、松原市にある倭の五王の一人反正天皇の柴籬の宮を通してあり、応神天皇陵には藤井寺古市を通してすぐである。柏原市 羽曳野市 藤井寺市 松原市 堺市との連携が大事である。倭の五王の一人 反正天皇に関する記事を河内新聞に掲載したので参考に紹介する。

「記事紹介」(河内新聞平成26年11月15日付け)

「河内王朝時代 反正天皇の宮跡 柴籬神社と御陵を巡る」

応神天皇に始まり仁徳天皇、その子の履中天皇(長男)、反正天皇(3男)、允恭天皇(4男)と続いていく河内王朝。御陵は百舌鳥に仁徳天皇の御陵を中心に北に反正天皇、南に履中天皇の御陵が並ぶ。古市には応神天皇と允恭天皇の御陵がある。一方天皇が政務を執られた宮殿は、応神天皇が難波上町台地大隈の宮、仁徳天皇が難波上町台地高津の宮、反正天皇が丹比(松原)柴籬の宮、雄略天皇が(八尾)志幾の宮そして顕宗天皇が近つ飛鳥にあった。河内(当時は難波から和泉まで)が、政治行政の中心地であった。

倭の五王の反正天皇

古事記、日本書紀によると第18代反正天皇(別名:多遲比瑞齒別命)は、「多治比の柴籬の宮か坐(いま)して天の下治めたまひき」、「河内の丹比に都つくる 是を柴籬の宮と謂す」と伝えている。反正天皇(在位406-410年)は、この地を都として政務を執られた。近鉄河内松原駅より東南に徒歩10分の所で、回りは静かな住宅街(松原市上田7丁目)である。昔、この地は難波と大和を結ぶ大津道と多比道の間であり反正天皇が河内と大和を治めるには重要かつ便利な拠点であった。反正天皇の時代は日本書紀によれば、「風雨時に順ひて、五穀成熟(みの)れり 人民富み賑わい天下太平なり」とある。仁徳天皇が河内の治水灌漑工事を進め、農地開拓の成果があがって成長発展した良き時代であった。また中国宋書によれば、この時代倭国に五王あり宋に人を派遣し交渉を深めたとある。倭の五王は履中、反正、允恭、安康、雄略天皇に該当するとされ、反正天皇も輝かしい河内王朝の有力な天皇の一人であった。



反正天皇の宮跡 柴籬神社 (河内新聞) (反正天皇は齒並びが美しかった)

反正天皇陵墓 百舌鳥耳原北陵

柴籬神社から西に車で約20分、南海高野線堺東駅の東側に反正天皇の御陵がある。全長148m 前方後円墳で周濠がある。5世紀後半に建造された。大きさは仁徳天皇や履中天皇の御陵に較べると小ぶりであるが威厳のあることには変わらない。

4. 八尾のほかの観光資源との一体性の強化

八尾には国史跡の高安千塚古墳群のほかにも国史跡心合寺山古墳、雄略天皇・物部氏と関係ある恩智神社、物部氏ゆかりの洪川神社、日羅上人ゆかりの日羅寺・樟本神社、聖徳太子ゆかりの大聖勝軍寺・信貴山、平成29年国史跡に指定された道鏡と孝徳天皇の由義寺の跡・由義の宮跡、由義神社、弓削神社、蓮如上人の顕証寺、河内音頭の常光寺等と、神社や仏教にゆかりの場所も多い。ブランドの日本遺産候補高安千塚古墳群と観光資源の一体化を果たすべきである。

5. 観光拠点となる観光施設の建設

八尾は大和三輪山王権、応神、仁徳、雄略天皇の河内王朝の百舌鳥古市古墳群、高安千塚古墳群、信貴山・法隆寺、四天王寺、難波の宮に囲まれており、河内の中心地である。そのためにも、集客の目玉になる河内王朝、高安千塚古墳群、仏教の歴史を紹介し、しかも楽しめる新しい観光施設を高安千塚古墳群付近に建設して頂きたい。ストーリーと観光案内、ブランド力ある土産物と地域特産の物産販売、グルメ、河内音頭、イベント、遊覧飛行、観光バス乗降の場所として活用したい。

6. 八尾空港と土産物のブランド化

観光飛行では八尾空港から、大和三輪山、百舌鳥・古市古墳群、高安千塚古墳群、法隆寺、四天王寺、難波の宮、大阪城を遊覧飛行すれば必ずブランドになるので観光飛行を官民一体となってぜひ実現し、観光飛行の八尾空港をブランド化していただきたい。

また高安千塚古墳群、雄略天皇、物部氏、百済王朝、渡来人などの特徴を生かした土産物企画および地域の特産品を生かした土産物の企画と販売体制の強化が必要なのは言うまでもない。

7. イベントの強化

- (1) 高安千塚古墳群をよく知ってもらうため、高安山麓でウォーキング、ハイキング、特産品販売、セミナーなどのイベントを特徴説明とともに総合的に行う必要がある。また雄略天皇、物部氏、百済王朝、渡来人もそのイベントにからませないといけない。心合寺山古墳、恩智神社、信貴山などもそのイベントのなかに組み込むこともよい。また物部氏、日

羅寺樟本神社、聖徳太子の仏教関連のイベントも必要である。

(2) 他の地域との連携イベントの強化

河内王朝や聖徳太子関連の史跡が多い羽曳野、太子町、四天王寺、法隆寺と連携した合同イベントも望ましい。また応神天王の母神功皇后の住吉大社や仁徳天皇の高津の宮・難波の宮との合同イベントを合わせて行えば全国的な集客に繋がる。他地域との連携イベントを企画することが大事である。

(3) 世界的なイベントとの連携協力の強化

最後に集客には日本遺産・世界文化遺産の観光とともに、グルメ、特産品の土産物の物販事業、癒しの温泉事業、景観事業、スポーツ事業、映像事業、アトラクションや娯楽事業が効果的である。とりわけ今後ラグビーのワールドカップ、オリンピック、ワールドマスタースターズ、I Rカジノ、万国博覧会など世界的な観光関連のイベントが目白押しであり、その関連事業の誘致を図らないといけない。地域振興が実現できることは明白であるが、まず関係団体との関係を強化し、具体策について全力で取り組む必要がある。

謝辞

本論文を大阪経済法科大学地域総合研究所の紀要論文として取り上げて戴きましたことに御礼申し上げます。また本論文を作成するにあたり、大阪経済法科大学名誉教授・元副学長・洞窟環境NET学会会長 沢 勲先生、会員の皆様、河内新聞社主 小山 博様、八尾市教育委員会様、八尾市文化財調査研究会様はじめたくさんの皆様から、ご指導・ご支援を戴きましたことにここに厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 沢 勲 編集『洞窟環境NET学会紀要3, 4, 5, 6, 7, 8号』洞窟環境NET学会 (2012~2017)
記事掲載の各講演会提供資料及び大阪歴史博物館・近つ飛鳥博物館の講演会資料
百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進本部会議発行資料 (2017)
上田 正昭 白石 太郎『東アジアの巨大古墳』大和書房 (2008)
武光 誠『古事記 日本書紀』PHP文庫 (2011)
直木 孝次郎『古代国家の形成』吉川弘文館 (2009)
直木 孝次郎『古代を考える 難波』吉川弘文館 (1992)
前田 晴人『古代王権と難波・河内の豪族』清文堂 (2000)
平野 邦雄『古代の日本 畿内の帰化人』角川書店 (1970)
熊谷 公男『大王から天皇へ』講談社 (2000)
奈良本 辰也編集『読める年表 日本史』自由国民社 (2010)
上田 正昭監修 小笠原 好彦『難波京の風景』文英堂 (1997)
坂本 太郎校注『日本書紀』岩波書店 (1967)